

日本に牛痘苗の活着したことを報じた *Jausasche*

Courant (一八五〇年一月五日付) の記事について

添川正夫

嘉永二年六月(一八四九年八月)蘭船 *Stadt Dordrecht* 号によって活性のある牛痘苗が長崎にもたらされたが、これは日本の痘瘡防遏史上画期的な出来事であった。その後、この痘苗株が日本各地に伝えられ、牛痘種痘法が実施されるようになったからである。

この事は、日本の痘瘡防遏のために長年の間、再三、再四、日本に痘苗を送達しようとして、それまで成功しなかったオランダにとっても大きな朗報であった。

Jausasche Courant (一八五〇年一月五日付) に報じられた関連記事は、短文ではあるがオランダ側が当時の事情を伝えたものとして注目すべき史料である。(図一)

本史料については、古賀十二郎がその著「西洋医術伝来史」二八三—二八四ページに紹介しているが、モーニケから医事局長に宛てた手紙、わが国の受入れ状況に関する部分などが省略されている。

今回は記事全文を紹介し、これに若干の注解を加えた。

翻訳は東京大学文学部助手高橋達史氏による。

関連記事原文

danken, dat eindelijk het zoo lang beoogd doel is bereikt; daar het gelukt is bij een der Japansche kinderen, met die roven ingeënt, eene schoone vaccine pok te verkrijgen, terwijl de overige naar *Japan* gezondene pok lympha, zich evenzeer als vroeger, onwerkzaam heeft betoond. Spoedig werden te *Nagasaki* ruim 900 kinderen met goed gevolg met deze stof ingeënt.

De geneesheer *Mohnike* heeft daaromtrent aan den chef over de geneeskundige dienst het volgende berigt:

Ik ga nu alle maanden naar *Nagasaki*, om te vaccineren, alwaar ik twintig kinderen vind, die van heinde en ver komen, om de stof in het verder gelegene land te verspreiden.

De Japansche geneesheeren komen hier, om de kunstbewerking te leeren, en de Gouverneur doet mij, door de politie op eene wijze bijstaan, die menig Europeesch gouvernement zou beschamen: de contrôle wordt met de uiterste naauwkeurigheid gehouden, en binnen korten tijd zal de vaccine over geheel *Japan* verspreid zijn, zonder vrees, dat zij zal uitsterven; op de aanstaande hofreis, zal ik trachten haar naar *Jedo* en *Miako* over te brengen.

Het is bekend, dat de kinderziekte binnen het rijk van *Japan*, meermalen verschrikkelijke verwoestingen heeft aangerigt; nog onlangs had zij op het eiland *Nippon* eene zoo groote sterfte doen ontstaan, dat men te *Jedo* tot het opmerkingswaardig besluit kwam, om de hulp van den Hollandschen geneesheer in te roepen. Dit kwaad zal thans aldaar weldra gestuit worden voor zoo veel menschelijke kunst dit vermag, en zal het rijk van *Japan* aan het onderhouden der vriendschappelijke betrekkingen met *Nederland* iets te danken hebben, dat met regt mag beschouwd worden als eene groote weldaad, aan deszelfs bevolking bewezen.

三〇年^{*1}の間、数度にわたり試みられて成功しなかった牛痘苗の日本送達^{*1}が、成功した。

モーニケ軍医が日本に出発する際には新しいウイーン系^{*2}の牛痘苗が託された。しかし、これも期待した結果を得ることができなかった。

この度、日本に向けて出帆したドルトレヒト市号に乗せて、新たに注意深く採集した牛痘苗が、さまざま方法で送られた。

その中には、医事局長^{*4}が、牛痘苗がとりわけ美事な発痘を示した自分の子供の一人から採集した若干の痘痂^{*5}が含まれていた。非常に長い間めざしてきた目的がついに達成されたのは、この幸運な思い付きの賜といえよう。何故ならば、日本に送られたその他の痘漿がこれまでと全く同様に反応を示さなかったのに、この痘痂を接種された日本人の子供の一人に、美事な牛痘を発痘させるのに成功したからである。

長崎では、この痘苗が速やかに九〇〇人以上の小児に接種されて善感した。

モーニケ医師は医事局長につきのように書き送っている。

『私は近頃、種痘をするために毎月長崎^{*6}に行っております。ここには痘苗をさらに遠方に広めるために処々方々から二人の子供達が集められています。』

日本の医師達も接種法を学ぶために来ております。長崎奉行は役人達に私の手伝い^{*7}をさせていますが、そのやり方はきわめて精密に統制が保たれており多くのヨーロッパ政府をも顔色^{*8}なからしめるものであります。

この痘苗は絶滅する恐れもなく、短期間のうちに日本全土に広まることでしよう。私は、次回の江戸参府の際にこれ^{*8}を江戸と京都に持って行くように努めます。』

日本では、これまで度々痘瘡^{*9}によって悲惨な状態が引き起こされたことが知られているが、最近痘瘡により非常に多く

の死者が出たので幕府の關係筋の人達はオランダ医師の助力を仰ぐべく注目すべき結論に達したのである。

この災厄は日本においては、人力を尽しさえすれば間もなく防遏されることであろう。そして、日本国は、オランダとの友好關係を維持してきたことにいくばくかの感謝をすべきであろう。

これこそ、まさしく日本国民に与えられた偉大なる恩恵と見なされてよい。

注解

* 1 「三〇年の間……」

文化年間にはオランダ軍医某により、一八二三年にはP・F・シーボルトにより、一八三九年にはリシュールによって牛痘苗の日本送達を試みられ、これらの痘苗は到着時すでに活性が失われていたり、活着してもその後継代でできなかったりしたのであるが、今回はじめて日本に広く用いられるようになった痘苗が活着したのである。

* 2 「ウィーン系の牛痘苗」

D. Baxby によれば、ウィーンの de Carro は、一八〇一年 Luigi Sacco がロンバルディアで発見した牛痘株を入手し、これをバグダットに伝え、これがボンベイ、コンスタンチノーブルに伝わり、さらにポーランド、ロシアに伝わったと云う (D. Baxby: *Jenner's Smallpox Vaccine*, p. 133, 1981)。

また J. Z. Bowers によれば、de Carro は最初ロンドンの A. Marcet から Jenner-Woodville 株を入手し、この株をウィーンからコンスタンチノーブルに伝えただけでもバグダット、バスラ、ボンベイ、仏印、さらにバタビアに伝えたものは Sacco がスイスのルガノの市場で牛から採集した株であったと云う (J. Z. Bowers: *When the Train Meet*, p. 23, 1980)。

両者の記述に若干相違する点はあるが、本記事で weener vaccine stof とあるのは Sacco 由来のものに見なされる。

因みに、一八四九年わが国に到着した株については本記事には記されていないが、これもまた Sacco 由来のものであったらうと思われる。

* 3 「さまざまな方法で…」

檜林宗建はその著「牛痘小考」一枚目に、一八四八年に到着した痘苗は『痘液密封外氣ヲ触ザラシム』状態で送られて来た」と記している。痘漿が硝子板に塗られ、その周囲を密封して送られてきたことをいうのであろうが、今回はこのほかいろいろと工夫して送ってきたものであるろう。

吉雄圭斎は、到着した痘苗について、『牛痘（当時牛痘局所ノ一部分ヲ截切シ瓶中ニ固封シ来ル）膿痂共ニ船齎シ来リ』と述べている（東京医事新誌 二二三三号 一六一一九 明一五）。痘痂の場合には痘漿の場合と異なり、瓶なども利用されたものと思われる。宗建は、「牛痘小考」二枚目に、モーニケは『痘痂五六枚ヲ取テ』接種したと記しているが、これなども痘痂の瓶中保存を想像させる。

* 4 「医事局長」

古賀の訳文では医事局長のあとに *Bosch* 氏と記している。

Willelm Bosch（一七九八一—一八七四）は一八四五年蘭領東インド諸島の医事局長となり、同地の医事、医学を確立した人で、愛情豊かな人物であったという（*D. Schoute: Occidental therapeutics in the Netherlands East Indies during three Centuries of Netherlands Settlement. pp. 141~149, 1937.*）

* 5 「痘痂」

モーニケが一八四八年に持参した痘苗の活着しなかった時、宗建はモーニケに、人痘種痘の経験から痘漿よりも痘痂の方が活性保存上有利と考えられるので牛痘の場合にも痘痂を輸入してはどうかと建言し、これが実行された結果、活性のある牛痘苗の輸入に成功したことがよく知られている。本記事でも痘痂を送るという思い付きが活着成功の原因であったことを裏書きしている。

* 6 「長崎に行っております」

居留地外の江戸町蘭通詞会所内に設けられた種痘所に行っているとの意。

* 7 「手伝いをさせています」

種痘実施に伴う行政的、事務的業務のことと思われる。

* 8 「これを江戸と京都に持って行くように努めます」

モーニケはこのように書いてはいるが、京都には長崎の大唐通事頼川四郎八の託送した痘苗が同年すなわち嘉永二年九月に日野鼎哉の許に到着、江戸には鍋島藩島田南嶺の持参した痘苗が同年十一月に鍋島藩邸に到着し、その後前者は北陸、近畿、四国方面に、後者は関東、東北方面に伝えられたのであった。

* 9 「痘瘡」

原文では小児病となっているが、前後関係から痘瘡と訳した。当時、小児における痘瘡死亡率はきわめて高く、痘瘡を無事に過してはじめて小児の成育が保証されるのであった。(日本医史学雑誌 二七卷 八三—九四 昭五八 参照)

結 び

Jarache Courant の記事によって、嘉永二年に舶来してわが国に活着した牛痘苗はジャバで医務局長が自分の子供の発痘から採取した痘痂であったこと、一方、受入側のわが国の種痘業務がきわめて整然たるものであったこと、さらに、日本の痘瘡防遏に大きな貢献をなし得たことについてオランダ側が大きな喜びと自負の念を抱いていたことなどを知ることができる。

謝 辞

本文に引用した *Jarache Courant* (一八五〇年一月五日付) は、Beckham 薬品株式会社開発部の堤可厚博士がインドネシ

アで二年がかりで探索し、一九七六年四月に国立図書館の裏手にある通産省の古い煉瓦造りの倉庫に山積みとなって退蔵され変色していた古新聞の包みの中から探出して下さったものである。かくて、古賀十二郎先生がその著書に引用されている『Java courant (ジャバ新聞)』の現物を見たいという筆者の念願が叶えられた。

堤博士の友情と熱意とには感謝の言葉もない。

また、農林水産省家畜衛生試験場の杉森正博士はオランダ留学中に筆者に本記事の概要を教示され、さらに高橋達史博士を紹介して下さい、高橋博士は御多忙中にもかかわらず快く本文の翻訳をお引受け下さったのである。

先達古賀先生の御報告に、若干なりと知見を追補できたとすれば、それは全く堤、杉森、高橋三兄のおかげであり、心からの感謝を捧げるものである。

News in Javaasche Courant, dated January 5th, 1850,
which reported the successful Introduction of
a Cowpox Strain into Japan

Masao SOEKAWA

In the late Edo period, Dutch physicians stationed at Dejima, Nagasaki, had tried for more than thirty years to introduce a cowpox strain into Japan. After several unsuccessful attempts, a live cowpox strain arrived at Nagasaki in 1849 through the courtesy of Dr. O.G. J. Mohnike.

This strain was distributed gradually to various parts of Japan and cowpox vaccination started in Japan. Therefore, the introduction of this strain was a milestone in the history of smallpox prevention in Japan.

At the same time, the success was a great joy for the Netherlands, which had endeavored for many years to introduce a cowpox strain into Japan in a viable state.

Javasche Courant, dated January 5th, 1850, reported briefly but vividly on this matter. From the news reported we can understand the circumstances at that time.

The news can be abstracted as follows:

Cowpox materials arrived as a vaccinal crust obtained from one of the children of Dr. W. Bosch, the head of the medical service in the Netherlands Indies.

Distribution of the strain was carried out with the aid of the officers of the Nagasaki Magistrate's Office. They managed the service so well that even European authorities could hardly surpass them.

Japan should be able to subdue hereafter the scourge of smallpox by adopting cowpox vaccination, and the Japanese should recognize with gratitude that this boon came from a long lasting friendship between Japan and the Netherlands.